

本を選ぶ

NO.420 2020年(令和2年)5月20日

●発行／ライブラリー・アド・サービス

<http://www.las2005.com>

本社 〒335-0004 埼玉県蕨市中央 5-20-1 TEL=048-432-3726

●<くろん・ぼわん>意識したのは2月…世の中が変わった

●司書の眼 第40回

●自分たちで作成した二次資料が研究者の役に立ったこと

●鳥の目 第78回

●●●●●ろん・ぼわん●●●●●

意識したのは2月…世の中が変わった

前号は「新型コロナウイルス感染症」についての情報や状況などジャーナリスティックなものでしたが、今回は個人の視点と所感です。

本に関わる4人に以下の質問をしました。

①いつ感染拡大を意識しましたか？②緊急事態宣言で最も変わったことは？③収束後に何かが変わると思えますか？④今、誰かに勧めたい本があれば、それを1冊(理由不要)。

・東京杉並区で個人書店 Title を営む辻山良雄さん。

①2月中旬。お客さんの顔が、日増しに不安そうなものになっているのを感じていた。人の動きがひそやかなものになっていった。②「宣言」により街の風景が変わったわけではないが、こうした強い声には確かに効果があるのだと思った。そうした声に強制されない世界はいかに貴重で、それは個人が守っていかなければならないものだとも。

③一人一人が自分で考え、行動に責任を持つ社会に変わりたい。④メイ・サートン『独り居の日記』みすず書房

・東京・紀伊國屋書店新宿本店の中里有里さん。

①2月下旬あたりから。マスクや消毒液が市場からなくなってきたとき。②世の中が変わった。都心からは人がいなくなり、大手デパートや繁華街は軒並み休業。同時に日本経済が止まってしまった。唯一、自粛することで大気汚染が一時的であっても回復傾向になったことはプラス。③経済や政治。コロナで

浮き彫りになってしまった政治的問題や経済回復ははかり知れない。④ジャレド・ダイヤモンド『銃・病原菌・鉄(上・下)』草思社

・4月に新たな職場として入社した後、すぐに在宅勤務になったアノニマ・スタジオの井上春香さん。

①2月下旬。各所でイベント中止や自粛、映画館や美術館が臨時休館になりました。②人と会わなくなり、電車に乗らなくなったこと。未だワクチンがないことや、感染しても無症状の場合があることに対して危機感を持つようになっています。③世の中が大きく変わると思います。自分だけでなく、他者を意識した社会へと進んでいくのではないのでしょうか。今は想像力を養う時期なのかもしれません。④しょうぶ学園『カリヨン黒板日誌』パルコ出版

・翻訳家と大学教授の二つの顔を持つ金原瑞人さん。

①2月19日、中国人のゼミ生から、3月中旬のゼミ合宿を中止しようというメールがきたのがきっかけ。②大学の授業のオンライン化。異様に時間がかかっています。ただ慣れると案外と便利で、来年度も少し使おうかと思っています。③大きく変わることはないでしょう。人類は学ぶことが苦手ですから。もし得意なら、とっくの昔に戦争もテロも原発もなくなっているはず。④王城夕紀『マレ・サカチのたったひとつの贈物』中公文庫

四人四様です。いつの時でも、人の考えや感じ方に耳を傾けることは、自分を見つめ直すきっかけになります。今後も正しい情報に交じって憶測やデマが飛び交うと思いますが、どうか惑わされることがないように。(酒井 謙次)

司書の眼 第40回

—マンガ、そしてCOVID-19—

鷹野 祐子

研究所でマンガの蔵書を増やす計画をして数か月、いままで洋書ばかりなんでしょ？ わからない本ばかりある医学図書室なんでしょ？ と足を踏み入れなかった人々が図書室にくるようになった。主に、事務系の人、秘書さんたち、学生さん。学校とちがって研究所の図書室には学生さんはあまり来ない。なぜかみなさん図書室は「怖い」「怒られる」と思っているようで、日頃大学図書館でどのような指導を受けているのかな？と思うことがある。図書室入口近くのテーブルに、マンガをディスプレイして置く。新型コロナウイルスの影響で学校が休校になり「こどものために」といって借りていく人、手に取って見たら面白かったので全巻読んでしまった人、続きはまだですか？と聞いてくる人などなど、マンガ効果は成功したようだ。蔵書の基準として一応医学・科学に関係するマンガで、完結しているタイトルを選んでいる。未完だといつまで購入すればいいかわからないし、その後も話がどう展開するのかも監査的に心配になる。最近は精神医学系、発達系、医学系マンガがどんどん企画されて出てきている。初回で発達障害のこどもの手をトイレの便器に手を入れさせる療法をする児童精神科医とか、ネットで賛否両論が交わされているマンガもある。老若男女、いろいろな人が読むことで自然淘汰され良質なマンガが残るのを待っている。

「陽だまりの樹」

マンガの所蔵と聞いて、研究所の副所長が手塚治虫の「陽だまりの樹」を寄贈してくれた。この話は、あるとき順天堂大で講演をした手塚治虫が「先祖は医者だった」という話をしたところ、日本医史学会の深瀬泰旦氏が曾祖父の手塚良庵という医者の資料をおくってくれたことにアイデアを得て書いたそうだ。手塚治虫自身、大阪帝国大学附属医学専門部出身で医師免許をもち医学博士である。

幕末のころの江戸では天然痘が流行っていた。話はそれるが、感染症というのは外来からやって

くることが多い。昔、山丹交易（さんたんこうえき）という、アイヌの人たちと山丹人（大陸沿海州の民族など）との間で、樺太中継しておこなわれた貿易があった。そのとき、アイヌの人たちは、浜で山丹人と直接会って売り買いするのではなく、浜に商品を置いておき、船が下がってから相手が置いた商品を確認するといった方法をとっていたという。まさしくソーシャルディスタンスをとって交易していたのだ。そういう工夫で感染症を（たまたまかもしれないけど）防いで交易していたのだよ、と寄贈してくれた副所長が言っていた。

さて、天然痘はその伝染力の強さと致死率の高さで日本中を苦しめ続けていた。イギリスのエドワード・ジェンナーが牛痘種痘法を発表してから、世界では種痘による天然痘の予防が可能になり、日本では佐賀藩、阪神地区で種痘所が立ち上がり効果をあげていた。しかし、江戸では漢方医の権力が強く、蘭学医は幕府から蘭学医学禁止など出されて分が悪かった。青年医師・手塚良庵の父良仙らはこどもたちを天然痘から守るため、種痘所設立に奮闘していた。そのころ良庵は、1838年に蘭学者・医者として知られる緒方洪庵が開いた大阪の適塾に行き蘭学を学ぶ。そこで福沢諭吉をはじめとするのちに幕末に関係していく人物と出会っていくのである。

歴史の中に生きる

昨年の今頃は戦国時代にはまり、夏の琵琶湖旅行を楽しんだ。今年の大河ドラマ「麒麟がくる」も明智光秀と戦国色が強く、ドラマ的には主役の明智よりいまのところ信長の正室帰蝶やその父齋藤道三のほうが目立っていて、このまま織田信長に吞まれて行くのかというかんじではあるが、毎週楽しみに見ている。COVID-19の影響で、ドラマの収録も途中でとまってしまったらしいし、今年は個人的には幕末の波がやってきそうな気配である。

さて、大阪に行った良庵は、女遊びを洪庵にとがめられながらも蘭学を治め、江戸に帰ってくる。そして父良仙と一緒に「種痘をすれば牛になる」と信じている人々を説得して回る一方、種痘所設立に奔走する。その間にも1862年の麻疹やコレラ（コロリ）の流行など感染症が江戸を襲い、良庵たち蘭学医は庶民の治療にあたっていく。時代は、1853年にペリーが来航し、1858年タウンゼント・ハリスが14代将軍徳川家茂と日米修好通商条約を結ぶまでについても、歴史に沿って詳しく書かれている。ハリスに通訳兼書記官として随伴したヘンリー・ヒュースケンと架空の登場人物伊武谷万二郎との友情、その当時の人々の暮らし、山岡鉄舟、西郷隆盛、勝麟太郎（海舟）、土方歳三をはじめ幕末時代の立役者が次から次へと登場してきて討幕へと続いていく。「安政の大獄」、「尊王攘夷」、「ええじゃないか」、「大政奉還」。日本史でおなじみの単語がこれでもか、と出てくる中、感染症と時代の変革は一緒にあった。その中で、良庵は幕府軍の軍医となっていく時代に翻弄されていく。司馬遼太郎の一連の作品を読んだ時も思ったが、歴史は物語であり、物語でない。現代も後から見ればそれぞれの物語がたくさんでくるだろう。でも今現在を生きている私たちにとっては物語ではなく、「今」の連続なのである。

妖怪アマビエの復活

「陽だまりの樹」は1981年から1986年に「ビッグコミック」（小学館）で連載されていた。成年向けマンガであるので描写には偏りがあり、そのまま子どもに見せられるものではないのが大変残念である。日本は（いや世界は？）今回の新型コロナウイルスと同じように何度も感染症の危機にさらされてきた。1918-1920年のスペイン風邪でも世界中で5億人が感染し、1,700万人から5,000万人、もしくは1億人が死亡したともいわれている。コロリの時も麻疹の時も、庶民はありがたいおまじない絵をもらってきて家にはっていたようだ。現代で

も、江戸時代に半人半魚で光り輝く姿で海から現れ、豊作や疫病の予言をしたという妖怪アマビエ（京都大学附属図書館所蔵資料）がデジタル化して復活しているが、疱瘡の「赤絵」、麻疹の「はしか絵」と同じように、COVID-19の「コロナ絵」など出てきてもいいかもしれない。きっとそれは手作りマスクをしていると思う。

Do the hokey pokey

感染症つながり、ということで、カミュの「ペスト」が注目されているという。2018年に放送されたNHK「100分de名著」が再放送されていたので、視聴した。番組では、まだ新型コロナウイルスがくるとは知らない伊集院光氏が、2013年の東日本大震災の放射能汚染とペストを関連づけてコメントしていた。物語はある市の医師リウーがネズミの死骸を見つけることから始まる。原因不明の熱病者が多発し、市は外部と謝絶され、住民たちは孤立状態のなかで感染症と戦う。「ある朝、グレゴール・ザムザがなにか気がかりな夢から目をさますと、自分の寝床の中で一匹の巨大な虫に変わっているのを発見した。」で始まるカフカの「変身」は個人の不条理を表しており、「ペスト」は集団の不条理を表現しているという。住民たちが戦っているのは感染症なのか？というのが、この番組のテーマになっていたように思う。「ペスト」が着手されたのは、1940年ナチスドイツによりパリが占領されている最中であつた。「異邦人」は占領下で書かれ、1944年解放後の復興期のパリで「ペスト」が刊行された。非日常を日常として暮らす住民たちの生活が、COVID-19で外出自粛中の自分たちと重なる。

歴史は繰り返す。さて、日本に世界にルネサンスがこのあと来るのであろうか。とりあえず、小中学生の「全国体力テスト」結果は下がりそうだな。自分が歴史の物語の中にいるのだと俯瞰してみるもの面白い。

（たかの ゆうこ：医学系研究所図書室）

自分たちで作成した二次資料が 研究者の役に立ったこと

菅 修一

送られてきた論文別刷

10年ほど前に勤務していた滋賀医科大学附属図書館（以下、同館）時代の同僚から、“古西義麿著「近江の種痘と種痘医・中村雄哉について」（『御影論集』44号 令和元年10月発行）の別刷が著者から同館に送られてきた。何故だろうと思って読んでみると、2008年10月に同館が開催した「湖国の医史」資料展示会の際に作成した『資料展示会「湖国の医史：先人たちの活躍を知る」記念誌』（以下、記念誌）のことが出てくる”、そのような連絡があった。「湖国の医史」資料展示会は、同館に「河村文庫」、「守一堂文庫」という二つの古医書コレクションがあったことから、近隣にある滋賀県立図書館（以下、県立図書館）の共催を得て県立図書館を会場に古医書の展示会を実施したもので、当時、筆者は展示会の担当であった。

筆者はその別刷を見せてもらった。別刷の著者は記念誌に収録されている「滋賀の人物誌資料に見る医療関係者」によって、滋賀県の種痘医を何名か新たに知ることができたと記していた。

自分たちで作成した二次資料

「滋賀の人物誌資料に見る医療関係者」は、県立図書館の滋賀県関係資料の中に多数の人物誌資料（滋賀県教育会篇『近江人物志』（文泉堂 1917）など19冊）があったので、資料展示会準備の際に、筆者が同僚とともに各人物誌から医療関係者を抽出し、各人物誌ごとに、人名、出身地、1～2行の簡単な説明事項、人物誌での掲載頁を表にまとめた人物リストである。

ヒントになった谷沢永一のエッセー

当時、どうして、あのような人物リストを作成しようと思ったのか。県立図書館が会場になるのだから、県立図書館の資料も少しでも紹介したい、そういう気持ちが確かにあった。でも、わざわざ、各人物誌の中身を探しこんで人物リストを作成し

たのは、国文学者・書誌学者の谷沢永一が「レファレンスの御担当が独自の作業で、書誌を編纂したのなら隠し持たずに、公表して万人の利用に供すればよい。そのとき私どもは書誌学者として歓迎し、その学恩に深く謝意を表するであろう。」（「サービス至上主義への疑問：図書館とは何か」『書誌学的思考』（日本近代文学研叢）和泉書院 1996pp. 630-632に掲載）と、述べていたことがヒントになった。谷沢は、図書館のレファレンス担当者が頼りにするのは既成の書誌であろう。レファレンス担当者は所蔵する各種既成の書誌を知り、使い方に習熟しようとする。レファレンス担当者は、既成書誌の使い方について利用者をサポートしようとする。だが、研究者は既成書誌を自力で使いこなせる。そういうサポートは研究者である利用者には不要である。そのようなことを述べていた。大学図書館の主たる利用者は研究者である。レファレンス担当者の存在意義とは何だろう、そう思いながら、谷沢のこの文献を読んでいたことが刺激となり、この人物リストを作成した。

前記人物リストを作成してから十余年、少なくとも一人の研究者がこのリストを使ってくれた。レファレンス担当者冥利に尽きるというものである。

今の図書館のトレンドは業務の効率化・省力化

だが、現代の現場にいる図書館員に、あなたも独自にオリジナリティのある書誌や二次資料を作りませんか、と勧めても反発を招くだけであろう。現場は人減らし、日常業務をこなすだけで精一杯なのである。資料展示会をすること、まして役に立つのかどうか、全く不明な書誌や二次資料を作るなんて、あなた暇なのですか、やること間違っていないませんか、と言われかねない。

無駄の効用、10年後20年後に役に立つかもしれないオリジナル二次資料作りに協力してくれた当時の同僚にただただ感謝である。

（すが しゅういち:花園大学）

為貞 貞人

中西悟堂の『定本野鳥記 第1巻 野鳥と共に』（春秋社／1978年）の扉の写真の1枚に目が留まりました。それは1934年（昭和9年）6月23日、中西悟堂の呼びかけで富士裾野須走で行われた日本野鳥の会（同年3月発足）の第一回の「探鳥会」に参加したメンバーの集合写真です。

総勢40余名のうち前列に北原白秋、窪田空穂、半田良平、柳田国男、中西悟堂、金田一春彦、中村星湖、後列には荒木十畝、岡茂雄、戸川秋骨、柳田三千子（国男三女）、若山貴志子（牧水夫人）、柳田千枝子（国男次女）、金田一京助、杉村楚人冠、内田清之助、清棲幸保の諸氏が見られます。本書「山野編 第5章 富士探鳥行」での悟堂の説明によれば、この探鳥会は「鳥巢見学会」の名称で小説家、詩人、歌人、画家、学会（英文学者、言語学者、鳥類学者）および新聞・放送・出版界の文化人が参加した画期的なものでした。

この富士探鳥行の実施について、悟堂は「富士須走の鳥の生活を、文筆や彩管を持っている人々」が「あの数多い鳥の巢や鳥の歌を、どういう風に見、聞くことであろう」という考えが起こり、農林省の内田清之助（鳥類学者）に相談、参加の快諾を得、ついで柳田国男にはかると、「柳田先生はよろこばれて、ぜひやっていただきたい、家族も伴っていくから」とすぐに同意されたと開催のいきさつを書いています。

注目されるのはその参加者の華麗な顔ぶれです。1930年代、日本の満州国承認、国際連盟脱退などファッション化と国際的な孤立化を深める時代背景を考えると、探鳥会に参集したこれら著名人それぞれに興味こそありますが、なかでも、当時「実験の史学」（『柳田国男全集27』ちくま文庫）を提唱、民俗資料の収集を重視し、独自の民俗学確立の道を進んでいた柳田国男と野鳥との関係に関心もたれます。

柳田国男は1902年（明治35年）に法制局参事官、1908年に兼任宮内書記官に任官し、同時に民俗学的研究をはじめ、1910年6月『遠野物語』を

自費出版し、新渡戸稲造を世話人に「郷土会」を開始しました。1919年（大正8年）貴族院書記官長を辞任、翌年朝日新聞社客員になり、1921年にはジュネーブの国際連盟委任統治委員に就任しますが、1923年、関東大震災のため急きょ辞任、帰国しました。帰国後は朝日新聞の論説委員となり、民本主義を唱えた吉野作造らとともに普通選挙の実現運動の先頭に立ち、大正デモクラシーの一翼を担いました。

柳田国男と野鳥

柳田国男は「私は昭和2年秋、ここ喜多見の山野のくぬぎ原に、書齋を建てて、ここを一茶のいうついの住みかになしようという気になった」と『野草雑記・野鳥雑記』（岩波文庫／2011年）の「記念の言葉」に書いています。この随筆集の各題の初出は、多くが柳田国男が喜多見の原、現東京都世田谷区成城に移った昭和2年（1927）から昭和14年（1939）の間の執筆です。

喜多見は今では東京の高級住宅街ですが明治の末頃までは武蔵野の雑木林と原野や広がっていました。昭和初期はその面影は残り、「あたりはまだ一面の芒尾花で、東西南北には各々二三本の大きな松が見え、風のない日には鳥の声が」あり、「久しく思い出さなかった少年の目が蘇ってくる」と述懐し、「昭和三年の初めての春は楽しかった」と「記念の言葉」の中で述べています。

新居周辺の武蔵野のすみれの色の鮮やかさやクサボケやヤマブキなどさまざまの花との出会いで草の話を一巻に集めたいと思立ちます。その時は『野鳥雑記』には思い及ばなかったようですが、もともと柳田は小学生の頃から大の鳥好きでした。

13歳で下総の利根川べりに来てからもメジロやヒワを捕って飼い、ヒバリの巢の声が発見は「今でもその日の胸の轟が記憶せられる」といい、旧友の川口孫治郎（鳥類学者）の「感化」もあり、「私の鳥好きは持続している」と自認しています。「そ

こへさして現れてきたのが、野鳥の会と中西悟堂君という無双の鳥好き」で子どものころからの思い違いを正すことができたとのことです。

柳田は新居の庭は始めは何も植えず、どんなものが生えるか空き地しておいたそうですが、あまりほこりが立つので芝を植えて張り、植物の生育を観察しています。まず顔を出したのが根笹の芽、またたく間にいやな草がはびこり、草取りが日課になったといいます。雑草の驚くような繁殖力、「智慧と名づけてよいほどの対抗手段」など「自身庭に降りて直接交渉するまでは、目の前にいながら丸で知らずにいた」、「人とこの話をして見たいと思うのに、大抵の場合は草の名を知らない」と述べ、「金田一春彦君が二夏つづけて、かくしに植物図鑑を入れて教えに来てくれ」「庭や門前の僅かな面積にもう三十種に近い雑草が算えられる」と「記念の言葉」に書いています。

『野草雑記・野鳥雑記』の「水こい鳥」には、柳田は「鳥と我々の祖先とは、今よりずっと親しい交際をしていたことが、彼らの名前からでも想像されると私は思う。鳥の名前は確かに人間の贈り物で、・・・それをもう一度思い出すということは、鳥によって我々の親たちの生活を知ることになるのである」と述べています。全国各地の子供から老人までの労働や生活にかかわる伝承や説話、それにまつわる鳥の地方の呼び名や鳴声の聞きなしの民俗学的考察に、柳田のいう野草や野鳥との「交渉」「交際」の一端がうかがわれます。

裾野で鳴いた鳥

日本野鳥の会の第一回探鳥会（名称「鳥巢見学会」）の様子は『定本野鳥記1』の「富士探鳥行」に興味深く描かれています。

昭和9年6月2日午後1時に参加者の大部分が東京駅に集合、御殿場駅で下車しました。駅では鳥類学者の伯爵清棲幸保が出迎え、自動車のたまり場に人待ち顔に立っていたのは沼津に住む若山貴志子でした。一行は自動車で出発、鋭いホトトギスの声や「キョロツ キョロツ コケキコキキキ」と明朗な声で鳴くクロツグミの声を聞きな

がら須走に到着しました。雨模様のうら寒い風が吹き、軽装の北原白秋が風邪をひきそうな天候。宿泊先の米山館には先着した柳田国男が二人の息女と待っていました。

まず茶菓をかこみ、猪川前橋放送局長が持参した、当日早暁上州沼田の迦葉山^{かしようざん}で録音した仏法僧の鳴き声のレコードを聞きました。声の主がコノハズクだと証明されたのは1936年ですから、当時は一般にブッポウソウ科のブッポウソウだと思われていました。夜は富士山麓の鳥に詳しい高田昴・兵太郎老の鳥の話や擬声を楽しみました。

翌6月3日の朝、浅間神社に勢ぞろいし、人数が多いので2班に分かれて出発。鳥の巢は出発点の浅間神社の境内で早くも見付き、桜の樹洞にキセキレイが、拝殿の裏側の長押の隅にオオルリがそれぞれ抱卵しており、墓石の石扉の中にシジュウカラの巢、裸のひながいるメジロの巢、青々したエナガの巢、寒天場の寒天を巢材にしたクロツグミの巢、純白でびかびか光るセンダイムシクイの卵、真っ青なコルリの卵などには誰もが興味をもち、松林にあった巢立った後のメジロの巢には、「若山貴志子さんはその美しさに感動していた」と悟堂は書いています。この日見つけた巢は実に20種で、10種の卵と5種のひなが観察できました。

のちに北原白秋はそのときのコルリの卵について「この美しさは、この清楚な青磁色の五つの卵は。私は思わず、膝を地について眺め入った。（中略）これこそ私たちが常に求めてやまぬ尊いある物ではなかったか。礼拝するような気持で、私はまた眺めてみた。」と雑誌『改造』（「きよろ鶯」昭和9年7月）に書きました。またひなについて窪田空穂の優しい目が注がれ、「立枯れの老木の洞の小鳥の巣わが近づくに雛口あくる」「いとけなき者のあはれさ雛どもよ早く目をあけ羽根はやし飛べ」と詠まれました。（『野鳥の巢を見歩く』『郷愁』／昭和12年；『窪田空穂歌集』角川文庫／昭和39年）

森林に行く一行に、「チブ チブ デューイ チブ チブ デューイ」とセンダイムシクイ、「ツキヒホシ ホイホイホイ」とサンコウチョウの音が降りか

かりました。「窪田さんは澄んだ心耳をいよいよ澄ませてキビタキやセンダイムシクイの歌に耳を傾け、小さな生きもののいとなみをいとしんでおられる様子であった」と悟堂は記しています。はたして空穂は「雪残る富士の裾野の若葉占め啼き遊ぶ鳥に我もまじりぬ」（「山林の鳥声」『郷愁』）と詠い鳥の世界に浸っています。

柳田国男は「裾野の会から帰ってきたら、なんだか急にうちのまわりの鳥の音が、多く新しくなったような気がする。あれがクロツグミだと教えてもらった鳥が、あたかも復習をしてくれるかの如

く、路の突当りの大きな赤松の上で、丁寧に何度も囀っている。」と『野鳥』誌（第1巻4号 昭和9年8月）に書いています。

この初回の探鳥会で灯された火はその後の大戦を越えて伝えられました。昭和21年、空穂が中国から還らぬ生死不明の次男茂二郎に思いを馳せ、「暗みゆく林の空の一つゐて声さまよひて黒つぐみ鳴く」（『冬木原』）と詠んだとき、かの須走の鳥のいのちのいとおしさが想起されたことでしょう。

（ためさだ さだと：さいたま市図書館友の会）

DMがたるく

株式会社 三善

SEED LEARNINGの多読教材 FUTURE JOBS READERS

テクノロジーの進歩に伴い生まれた職業を解説する
4レベル×各5冊のノンフィクション・リーダー



科学・テクノロジー・エンジニアリング・数学の分野で活躍する新しい職業の仕事内容を紹介。本文・単語集の音声収録されたオーディオCD付き。



Miyoshi 〒167-0032 東京都杉並区天沼2-2-3
TEL: 03-3398-9163 FAX: 03-3398-9170

街場の日韓論

アイゴ(アイゴー)、困っています。もつれた結び目を解くために、みなさんの知恵を貸してください。



執筆陣
伊地知紀子 小田嶋隆 白井聡 中田考
鳩山友紀夫 平川克美 平田オリザ
松竹伸幸 山崎雅弘 渡邊隆

荒れるネット言説、政治のねじれ、歴史修正主義者の跋扈にどう対処する？ 11人の寄稿者が考える、日韓相互理解への道。

内田樹 編
税込1870円

晶文社 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-11
Tel 03-3518-4940 <http://www.shobunsha.co.jp>

ESTRELA

■2020年5月号
No.314/5月10日発行
B5判 64ページ
定価1,205円(税込)

[特集] 労働市場と政策

- 介護負担と労働供給
近藤 絢子 (東京大学社会学研究所教授)
- 高齢者雇用の進展と課題
勇上 和史 (神戸大学大学院経済学研究科准教授)
- 「働き方改革」を介した生産性向上への取組み
ー イノベーション人材の育成・確保に必要なかー
松原 光代 (学習院大学経営学研究所客員研究員 (PwCコンサルティング 合同会社主任研究員))

公益財団法人 統計情報研究開発センター (Sinfonica)
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-6 能楽書林ビル5 階
TEL: 03-3234-7471 <http://www.sinfonica.or.jp/>

日本理学書 新刊目録

2020 A5判 / 56頁

- ◆ 会員出版社9社の新刊、約180点を紹介。
- ◆ 科学一般 / 数学 / 物理学 / 化学 / 天文学・宇宙科学 / 地球科学・地学・地質学 / 生物科学・一般生物学 / 植物学・動物学の8部門に分類。
- ◆ URL <http://www.rigaku.gr.jp>

日本理学書総目録刊行会

〒162-8710 東京都新宿区東五軒町6-24 トーハンビル内
TEL 03-3266-9521